

南京大虐殺下の性暴力 —被害者と加害兵士の証言から見る—

松岡 環

はじめに

- 一、南京掃蕩戦に関係した日本軍の状況
- 二、当時南京に滞在した人々の視線
- 三、実際に性暴力に関係した日本兵士の証言
- 四、性暴力被害を受けた人々の証言
- 五、日常的に頻発した性暴力の背景
おわりに

キーワード：南京大虐殺、性暴力、被害者、
元兵士、聞き取り調査

はじめに

筆者が初めて南京を訪れたのは1988年であった。その頃、日本社会全般や教育の世界でも、教科書問題と中曽根首相の靖国公式参拝で揺れていた。日本の教科書には近現代の戦争の記述は簡単で、原爆被害と空襲は詳しく記載されている。しかし、それ等の被害に至る前提としての長期に亘る中国全土への侵略やアジアへの侵略が的確に書かれていなかった。そこで筆者は子供たちが社会や道徳の時間を使って戦争と平和を学ぶには、副読本が必要だと理解した。まず、人命、資源面に甚大な被害を与えた隣国の南京と北京、上海などにある戦争資料館見学と戦争被害者の聞き取りを記録しようとしたのが始まりだった。初めてお会いした南京大虐殺の生存者は、李秀英と言う老女性だった。南京になだれ込んだ日本兵士が次々に人々を銃剣で突き殺すのを地下室の窓から見ていた。兵士の家探して自身も強姦されそうになり、抵抗したところを顔や腹をめった突きにされ家族からも死

んだと思われた女性だった。それでも彼女は辛い話の結びとして「悪いのは一部軍国主義者であり、民衆や我々生存者は同じ民衆同士で戦争の被害者です。仲良くしましょう。」と言われた。このころは外国人に南京大虐殺の悲惨な話をしてから終わるスタイルは、このように「民衆同士の友好」と決まっていた。しかし彼女はさらに小さな声でこういった「私は今でも日本人を見ると気分が悪い。」

この言葉を聞いて身体が凍り付いた。この人たちの痛みを日本の若者たちに伝えなくてはならないと思い、毎年南京へ聞き取りに行くようになった。そして記録を日本の人々に知らせるべく、毎回500~1000冊の報告集を作成し市民に配布した。教員の仕事面では、同僚と共に平和学習の副教材を作成し子供達の学びの一助とした。

数年後に活動として出来たことは、ニューヨークの中国人画家たちが描いた南京大虐殺絵画展覧会の開催だった。大阪を皮切りに沖縄、神戸、京都、大阪、東京、岡山等と会場を増やしていった。更にその後も全国に散らばる戦争責任をテーマに活動する友人たちと話し合い協力して、正しい歴史認識活動を広める活動を開始した。それは南京大虐殺の証言者を日本に招請して証言集を各地で開催する事だった。その活動は毎年12月に開催し、2014年の今年も全国7カ所で実施する予定になっている。

証言集会開始の同時期の1997年には、南京

攻略戦に参戦した元兵士の情報を集めるための『南京大虐殺情報ホットライン』を全国6カ所に電話ステーションを設置して情報を集めた。元兵士からの情報や地方の図書館にある資料を手掛かりにして、その時から日本兵士の調査が始まった。結果的には日本兵士の調査は10年以上の年月をかけ250名の記録（動画、音声、写真、日記やメモなど）を収集することが出来た。また、日本兵士の調査と並行して南京大虐殺の被害者の調査も同時に始め、日本兵士の調査と同じように10数年の歳月を費やして記録に残すことが出来た。

元兵士から託され入手した資料を基にして、筆者は加害兵士の証言集『南京戦一閉ざされた記憶を尋ねて』や『南京戦一切り裂かれた受難者の魂』『戦場の街南京一松村伍長の日記と程瑞芳日記』を出版することが出来た。更に58枚の写真パネル『南京大虐殺』を制作し全国40会場写真展を開催し、若い世代へ近現代の歴史認識を深める活動を展開した。

5年ほど前から、筆者は監督としてドキュメンタリー映画制作に携わっている。一作目の『南京引き裂かれた記憶』や二作目の『南京の松村伍長』は映画館、市民運動、組合など50数カ所で上映され、少しずつではあるが市民の間で広がりを見せている。

私たちの歴史認識活動は、宣伝規模も財力も小さく、各地の市民と連携して手作りで形成されている。その歴史認識活動は「戦争で被害を被った人の痛みを知り、如何にして平和な世界を築くか」を目標にしている。私たちの旗印は『前時不忘后事之師』である。先に起きた過ちを忘れず、後の教訓とするのは物事だけに関係したことなく、被害を受けた弱い人の痛みを知ることが、二度と悲惨な行いをしないことにつながると考えている。

南京に通い始めた頃、筆者は、南京大学歴史系の南京大虐殺研究者である高興祖教授に虐殺

跡地を案内して頂いたり、毎年一回以上の研究成果を私たち銘心会南京友好訪中団の団員に講演して頂いた。時を経ない内に、同大学や南京師範大学、江蘇省社会科学院の歴史系の張連紅教授や経盛鴻教授、孫宅巍教授たちとの交流、更に在野研究者たちとの共同調査に発展した。また同時に侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館との研究交流も盛んになり、館長や研究員と共に南京市街地の虐殺跡地調査や証言者の聞き取りの合同調査などをし、筆者が企画する南京や以外の市町村にある惨案の地での調査に南京研究者側が参加をする事もしばしばあった。筆者が中国現地で実施する調査は、一年に4～6回、一度の日数は1週間から二週間に要したので、上記の人々だけでなく通訳してくれる長年の友人たちや、運転を買って出る友人たちが証言者探しを積極的に協力を惜しまないので、ありがたく励みになった。

日本に於いては、南京事件研究会に参加される先生方が古くから南京大虐殺にかかる研究と調査をして来られた。洞富雄先生は、先駆者とも言われる方で1990年病床におられた先生をお見舞したことが記憶に残っている。一度しかお会いできなかったが、『日中戦争資料』の南京偏で膨大な資料を整理され沢山の著書を残された尊敬できる研究者である。藤原彰先生も既に鬼籍に入られたが沢山の書籍や論文を書かれ、筆者も先生には何度か講演を依頼、大阪まで来ていただいた事があった。笠原十久司先生や吉田裕、井上久士先生たちも長年にわたって南京の研究をされた方である。他にも南京研には近現代歴史研究者がたくさんおられるが、基本的には学術資料を基にした研究は、筆者にとっては、資料調査の面では大変勉強になり参考になったと言えるだろう。

物故された藤原先生、そして笠原先生たちもよく言われていた「南京事件は論理的には、幻派や少数派には勝っていて、論議は終わってい

ます。」と。しかし、南京まぼろし派、少数派、虐殺なかった派、歴史修正主義と時代と共に名前が変わって、日本の侵略の歴史事実を否定する人々が次々に登場し、現代も出現し続けている。基本的に彼らは、日本のかつての侵略戦争を認めたくなく、あからさまな反中国、嫌中、嫌韓の姿勢を表している。過去の日本が軍事一辺倒で他民族や他国を侵略した政策が、自国のみの目先の利益を守る国家主義的な主張をする人々と重なる。彼らの出版する書籍や雑誌はマスメディアに乗って書店やコンビニで手軽に入手できるほど平積みされ蔓延している。彼らのHPや宣伝チラシ等ではこのように言っている。「南京事件や慰安婦問題は情報戦だ。国を守るためには、これに打ち勝たなくてはならん。」

しかし、心と体に痛みを抱えた日本の侵略戦争の被害者は、隣国やアジア各地に実在している。彼らの記憶は家人や村の人々、社会の人たちに引き継がれて行く。また数は少ないが元日本兵士の語る加害の歴史事実は、掘り起こす人たちの手で明らかにされつつある。日本は、悲惨な出来事を起こした加害者である事実を未来永劫まで覆い隠せることはできないだろう。日本側の政治的経済的な理由で、歴史事実をねじ曲げ被害者の痛みを更に増すことは許されないことである。

1937年7月7日に日本は中国大陸への全面侵略戦争を拡大した。12月13日、直前まで国民政府の首都であった南京へ侵攻した日本軍は、徹底的に掃蕩を行い武器を捨てた元中国兵や無辜の市民を無差別に殺害した。加えて多くの日本軍将兵は、若い女性を中心にして、幼女から老年に至る女性まで性暴力を頻繁に行った。南京城内の路上や広場、家屋の中、果は城外の農地や空き地、クリーク、林の中、揚子江岸とあらゆる場所で膨大な数の老若男女の死体を目にする事ばかりだった。と、これまで聞き取りをした被害側の生存者と加害側の元兵士達は、それ

ぞれの具体的な体験を語っている。

南京大虐殺下で性暴力の被害にあった女性たちは、貞操を守れなかったという当時の道徳観念に縛られ、家族や夫、社会からも責任を問われた。被害女性たちは一般的な犯罪被害者の様に訴える事も出来ず、ひたすら耐え、口を閉ざすか自死に至る道しかなかった。当時の日本ではもちろん性暴力は親告罪であり、まして占領下の女性や親族からの訴えに聞く耳を持たなかった。

南京大虐殺下の性暴力被害女性たちは、証言や告発をすることによって、日本側の歴史認識と自身の人間性の回復を求めている。南京大虐殺下、非戦闘員である女性への性暴力、集団強姦は大規模に発生した。戦争の中で軍隊が組織的に女性や弱者への生命、人権、生活の破壊を行ったのである。性暴力被害者は、民族の差別を受けた上に、女性であることから尊厳を傷つけられ、被害者であるのにも関わらず非難され、二重三重に抑圧を受けた。今もなお昔の概念が残り、性暴力被害を名乗り出にくくしている。

一、南京掃蕩戦に関係した日本軍の状況

「支那事変」と称された日中戦争に参戦した部隊は中支那方面軍の部隊であり、九個師団と一個旅団から構成されていた。南京大虐殺に最も関係の深い部隊は、12月17日の南京入城式以降、南京警備の任に着いた第十六師団第三十旅団、旅団長佐々木到一少将（歩兵第三十三聯隊久居と歩兵第三十八聯隊奈良）の部隊である。この部隊は南京城内と郊外に中国人たちの家屋や公共の建物を占拠して駐屯した。南京城内では敗残兵の掃蕩の目的で国際安全区や南京城内から中国兵と断定した若い男たちを引出し集団虐殺した。また城外や郊外でも広範囲にわたって、掃蕩作戦を何度か実施した。男であり不審と見れば少年から老人までその場で撃ち殺され

るか、連行されてから集団虐殺される場合が多かった。

では南京警備とは実際にはどんなことをしたのだろうか。

佐々木到一少将私記¹には掃蕩や殺戮の文字がそこかしこに書かれている。南京に到達してからの佐々木私記を拾い読むだけで、南京警備とは、敗残兵を引出して集団虐殺することが最も重要な目的であったと理解できるだろう。

12月13日 「我が隊のみにて二万以上の敵は解決されている筈である。」「その後俘虜ぞくぞく投降し来たり数千に達す。激昂する兵は上官の制止を肯かばこそ片はしより殺戮する。」

12月14日 「両聯隊全部隷下に掌握、城内外の掃蕩を実施す。いたる所に潜伏している敗残兵を引き摺り出す。」「抵抗するもの、従順の態度を失するものは容赦なく即座に殺戮した、終日各所に銃声が聞こえた。」「太平門外の大きな外壕が死骸で埋められてゆく。」

12月16日 「命に依り紫金山北側一帯を掃蕩す、獲物少しとは言え、両聯隊共に数百の敗兵を引き摺り出して処分した。」

12月17日 南京入城式の日「七万の鮮血が江南の田圃とクリークを彩っているのは云うまでもない。」

12月21日 「我師団は南京城を含む周囲地域を警備。余は南京地区西部（城内を包含）警備司令官を命ぜられ、城内警備に関しては派遣軍司令官の直轄となる」

12月22日 「城内肅清委員長を命ぜられ、直に会議を開催す。」

12月26日 「城内の肅清は土民に混ざる敗敵を摘出して不穏分子の陰謀を封殺・・・」

1月5日 「査問会打切、此日迄に城内より摘出せし敗兵約二千、旧外交部に収容。」「城外近

郊にあつて不逞行為を続けつつある敗残兵も逐次捕縛、下関に於て処分せるもの数千に達す。」

以上の記述内容を拾い読むと佐々木到一の下で中国人男性たちの連行と集団虐殺が日常化している。第十六師団第三十旅団配下の歩兵第三十三聯隊と歩兵第三十八聯隊は南京城内外に最も長く駐屯し、南京城内外に潜む男たちの引き出しと集団虐殺を請け負った。さらに掃蕩摘出の時に女性への性暴力が当然のように伴った。そして掃蕩がない日常でも、日本兵たちは当然のように性暴力を行った。佐々木到一私記だけでなく、また、調査した被害者と加害の側の元兵士の証言などから南京警備の仕事が、捕虜と決めつけられた男達の駆り出しと集団虐殺、性暴力に結びつくことは容易である。しかも加害被害の両面から検証すると、元兵士だったとの判定基準は実に曖昧であり、殆ど査問も裁判もなかった。

二、当時南京に滞在した人々の視線

① 国際安全委員会委員長のラーベは、ドイツ本国への報告で、南京における日本軍の南京大虐殺の状況を述べている²。その中で「下は八歳から上は七十歳を越える女性が暴行され、多くは惨たらしく殺されました。局部にビール瓶や竹が突き刺されている女性の死体もありました。この目で見たのです。」と記述している。また虐殺数に関して「われわれ外国人はおよそ五万から六万と見ています。」「私が南京を去った二月二十二日には、三万の死体が埋葬できないまま、郊外の下関に放置されていたと言います。」とも書いている³。彼の行動は日本軍に制限されていて主に国際安全区の中で活動したので、安全区以外の数倍の広さ

¹ 財団法人偕行社『南京戦史資料集Ⅰ』、P265～、佐々木到一少将私記

² ジョン・ラーベ『南京の真実』、講談社、P316、ヒト

ラーベの上申書

³ ジョン・ラーベ『南京の真実』、講談社、P317、同上

のある城内や郊外農村部の状況は目にはしていない。しかし、彼は同メンバーがもたらす城外や城内の数少ない被害状況を集約できる立場にあった。

- ② ラーベと同じくドイツ人外交官のローゼンは、ドイツ外務省へ1938年1月15日付の南京ドイツ大使館分館の執務再開 南京の状況〔日本兵の残虐行為〕を本国のドイツ外務省へ発信している。集団虐殺や略奪放火、個別殺人、婦女子への強姦を具体的に報告している。「日本軍による放火は、日本軍の占領からひと月以上も経過した今日に至るまで続いており、婦人や若い娘の拉致や強姦についても同様である。」「いわゆる安全区のかなただけで、けだものじみた強姦は数百件も・・・異論の余地なく立証されている。」⁴
- ③ 南京に残った国際安全区委員会のマイナー・ベイツは、東京裁判で「(ラーベのドイツ本国の報告より少し前)、もともと内輪に見積もり、安全区内の委員会の報告のみによって、強姦事件は、8千件と見積もったのである。」と証言している⁵。
- ④ 同委員会のジョン・マギーは強姦場面、或いは強姦後の現場に駆けつけた。そのような中で、生命の危険を冒して撮影したマ

ギーの映像が、1991年に日本の戦争責任を研究するアメリカ籍の華僑によって次男のデヴィッド・マギーの自宅から再発見された。このフィルムには、南京大虐殺下の南京城内外の状況や鼓楼病院の瀕死のけが人の治療の様子、強姦受傷した女性の姿や強姦の被害にあった若い女性の映像等が映されている⁶。

- ⑤ 金陵女子文理学院（現南京師範大学）留守校の責任者であるミニー・ヴォートリンは婦女子の難民を受け入れ、若い中国女性の保護に力を注いだ。日本兵は連日、同校の竹の塀を乗り越えて一日に何度も押し入り女性を強姦したり拉致したりした。時には将兵が兵を連れて強姦目的で入り込んだと日記に記されている⁷。
- ⑥ ⑤の同大学でミニー・ヴォートリンを助け留守校を守っていた教員の程瑞芳は、日本軍の目を盗んでリアルタイムで日記（中国人が書いた唯一の日記）を書いている⁸。彼女の日記には、日本兵が連日何度も、女性を求めて校舎に侵入し強姦したことや、強姦被害にあった女性たちも助けを求めて外から避難して来る様子を詳しく記している。沢山の日本兵が入り込んで中国軍の元兵士を摘出連行したり、男性職員を連行す

⁴ 石田勇治編集『ドイツ外交官の見た南京事件』、大月書店、P66

⁵ 洞富雄『日中戦争資料8』、河出書房新社、P50
因に東京裁判の証言時に、強姦の数を言う前に「ラーベは虐殺数を5万6万と言ひ、強姦を2万と言っている」と証言している。

⁶ マギーが撮った日本軍の残虐映像は、1938年1月フィッチが上海に持ち出し、4月にアメリカに持ち帰って反戦活動の講演会で上映された。また5月16日の『LIFE』、誌に紹介され衝撃を与えた。1991年まで行方不明で、いわゆる「幻のマギーフィルム」と言われていた。このフィルムは、米国の華僑たちによってマギーの次男の家から再発見された。

⁷ 岡田良之助・井原陽子『南京事件の日々ミニー・ヴォー

トリン』、大月書店

ミニー・ボートリンによって命を助けられた中国女性たちは、彼女の事をファーシアジェ（華小姐）と呼ぶ。私は南京の被害者300人以上を聞き取り調査した。その中で金陵女子大に避難していた数十人の大部分の女性は、アメリカ人である彼女の名前を覚えていた。

⁸ 松岡環著『戦場の街南京—松村伍長の手紙と程瑞芳日記』、社会評論社、P213～

程瑞芳はヴォートリンと共に金陵女子大と中国女性を保護した。中国人の彼女の視点は、日本兵の非人間性や日本の外交官たちの無力さを鋭く突いている。そして民衆の命を何とか救おうと身を投げ出して奮闘している様子を毎晩記述していた。

る様子も連日にわたり書き綴られている。

⑦ 南京大虐殺下、唯一外科手術の出来る鼓楼病院で中国人のけがの治療にあたっていたロバート・ウィルソン医師の日記には、「日本兵はいきなり5,6人を殺し、二人はどうか病院に辿り着いた。首の筋肉を切断されてショック状態の床屋の男性や、一般市民の殺害はぞっとするほどだ。強姦や想像を絶する蛮行について書こうとすれば、切りがない。」との様子なども書かれている⁹。またマギーフィルムには、ウィルソンが病院で重傷者の治療をする様子や強姦を拒否して顔面と身体を刺され瀕死の重傷を負わされた女性¹⁰、輪姦されて性病を移された少女、強姦後首を斬られた女性が撮影されている。

⑧ 国民党政府が日本の敗戦一年前から聞き取り調査を行っていた「敵人調査委員会」による膨大な調査表¹¹には、日本軍が手を下した農民や市民への集団虐殺や個別殺害が記されている。その中に混じって女性への性暴力に関係する事件が数多く記録されている。B4大の用紙には被害者の氏名年齢、起きた場所、当時の職業のほか被害状況が書かれている。「強姦後殺害」「強姦後陰部に竹竿挿入」「強姦銃殺」「強姦後刺殺」「強姦未遂銃剣で刺殺」「女性の徴発を要求し、居ないので家人を殺害」など多くの似通った状況が記載されている。

以上、①～⑦の裁判記録や日記の記述や残された映像は、国際安全区に滞在して日本兵からの危害の危険を避けながら中国市民を助けよう

とした欧米人や中国人の記録の一部分である。

三、実際に性暴力に関係した日本兵士の証言

中隊長から南京では好き放題にしてよいと言われた居付万亀男さん(死去)に「慰安所に行ったことは？」と聞くと、「そんなのワシらの部隊は誰も金を出して行かん。ワシは金ばかり(盗る)やったけれど、強姦はよく見た。」「自分の中隊は国際安全区の中にある金陵女子大付近で一か月間南京警備部隊となった。門で警備していると将校とか上官、他の部隊の将校も来て大学の中へ入っていった。女の子の叫び声はいつも聞こえた。女性をトラックに積み込んで連れ去られるのも何回か見た。荷台に50人は積み込み、兵隊が乗り、上にシートをかぶせると女の子は大人しくなった。強姦は毎日あった。」¹²女性がトラックで連れ去られて性暴力を受けるというこれらの証言は女子大に避難していた女性たちの証言や教員のヴォートリンや程瑞芳の日記にも頻繁に見られる。

同聯隊第六中隊の亀田徳一さん(死去)は、太平門で1300人の集団虐殺に実際に手を下した人だ。太平門での大虐殺について始めから終りまで詳しく述べ「政府の言っていることは嘘だ。南京大虐殺は実際に自分がやってきたことだ。」と言い切る。南京陥落数日後、金陵女子大の正門で警備となり、「衛兵は三交代だから、みんな閑で女の子を捕まえに行った。部隊の予備役は若い盛りだから女の子に手を出す。初年兵は上が怖くて出来なかった。女性は桶の中などに隠れていたが探し出して強姦した。拳銃で脅か

⁹ 笠原十久司『南京難民区の百日』、岩波書店、P173

¹⁰ 李秀英さん、当時19歳で7カ月の身重だった。五台山小学校の地下室で隠れていたところを日本兵に見つかり、強姦をされそうになり抵抗した。顔や体を27か所刺されて腹の児は死んでしまった。彼女は治療を受けている時にマギーが映像を撮りに来た事を覚えていると、証言の時に話していた。(1988、1991年聞き取り)

¹¹ 南京第二歴史档案館にある「敵人調査委員会が作成した資料」は、国民政府が1944年日本軍の敗戦が濃くなり始めた頃から作成を始めている。中国民衆がどのような被害を受けたのかを用紙に記録している。中国全土となると膨大な量になる。

¹² 『南京戦 閉ざされた記憶を訪ねて』、P297 (仮名：井上益男)

して道路でやっているのも見たし強姦の場面には多く出くわした。今になっては惨いと思うが、あのころは何とも思わなかったな。」¹³と言う。

同聯隊第八中隊の寺本重平さん(死去)は、朝香宮の警護部隊になり本隊より数日遅れて南京に入城した。「中隊長は宮さんの護衛をしながら毎晩女の子を抱いて寝ていた。女の子はどこにでもいるわけではないが、藁の中とかベッドの下に隠れている。カンカンと言って娘を五人も六人もで押さえてやってしまうので女の子は泡を吹いていた。強姦は日本中のどこの部隊の兵隊もやっているし、言うか言わんだけの事や。」とまで言い切る¹⁴。

同聯隊第一中隊の鬼頭久二さん(死去)(仮名)は南京攻略の前では「草木も、犬も猫も生きて居る者は皆殺せ。」と小隊長から命令されたと言う。「南京では女の子を何度も強姦しました。寝台の下とかカーテンの浦に隠れていてもどこにでもいるので、女性をやりたい放題だった。自分らは第一線なので憲兵に怒られたり止められることはなかった。誰もが強姦を目当てにしていた。」という。分隊の者と二、三人で出かけ、「カンカン(看看)」と言うとみんな命が惜しいので大人しくなり抵抗はなかった。南京が落ち着くと難民区の中に入って女の子を探した。」と、こともなげに話していた¹⁵。

同じく南京警備に着いた三十八聯隊一中隊の田所耕太さん(死去)(仮名)は南京に「慰安所」があったかどうか尋ねると、部隊が設置した「慰安所」に行ったばかりでなく分隊でクーニャン徴発をしたと語った。「分隊でクーニャンを徴発に行って、主に寺などには女の子が隠れていました。南京の郊外で駐屯していて暇だから食べることに遊ぶことばかりでした。分隊で食べさせて女の子に飽きたら、また別のクー

ニャンを飼いました。強姦もしましたが、南京へ行くまでがひどかったです。」「(強姦した人は)五十人は下らんやろう。私等は第一線だったので、裸の死体や竹竿の刺し込まれた女性の死体をよく見た。」と言う¹⁶。生きるか死ぬかの瀬戸際においてむちゃくちゃな気持ちになっていたという。

多くの元兵士たちは、集団虐殺や掃蕩戦の時に中国の人々を殺して戦争だから仕方なかったと言う。しかし強姦したことを何と返答するのだろうか、質問しながら、筆者はいつも考える。彼らは、「自分の部隊ではみんな強姦する。」「勝ったら何でもやれる」と言う。日本社会では絶対やれない殺人も強姦も中国人に対してならやれると言う意識が兵たちの間で蔓延していた。

天皇の軍隊組織の一員として命令されて行った殺人。命令はなくとも暗黙のうちの了解であった性暴力。歩兵第三十三聯隊十二中隊の大門俊雄さん(死去)は「隊長も男やからいらん事すんなよ〜とクーニャン徴発に行く兵隊に言うだけや。軍医さんは、やる前に病気がないかどうか検査してやれよと言う位だった。」と軽く語る¹⁷。上官からは叱られもせず、暗黙のうちの了解のもとで中国女性への性暴力や鬭り殺しは明らかに存在した。また監督し制止する立場の多くの中隊長小隊長までが同じように女性を囲っていたのでは、止めようがないと言える。

四、性暴力被害を受けた人々の証言

1997年の夏、南京市教育委員会の企画により高校生の夏の活動として「75歳以上の老人から南京大虐殺の体験を聞き取る」活動が行われた。筆者が主宰する「銘心会南京」は、日本人や日本に暮らす華僑の高校生を組織してその活動に合流した。高校生たちが被害体験を聞き取

¹³ 同前、P 128 (仮名：徳田一太郎)

¹⁴ 同前、P 284 (仮名：三木本一平)

¹⁵ 同前、P 269

¹⁶ 同前、P 281

¹⁷ 同前、P 291 (仮名：太田俊夫)

る活動で訪問した530名分の名簿を筆者は教育委員会から入手し、これまで名乗り出たことのない証言を取材するために何度も南京に向き、老人たちの家を尋ねることにした。また老人たちを訪問した時には南京大虐殺を体験した親戚や友人を紹介してほしいと必ずお願いした。こうして自力で南京大虐殺の被害者を探し記録する活動が始まった。

以下に象徴的な性暴力被害の証言を紹介しよう。

南京城のすぐ南郊外雨花台区に住む鄭桂英さん(1921年生れ)を訪ねた。この地区は第六師団と第百十四師団の侵攻ルートで集団虐殺や強姦が多発している。声をかけても彼女はいつまでも出てこない。不審に思って家人に聞くと「日本人が来た。」と聞いただけで、鄭さんは恐ろしくて便所に隠れて出てこれなかったのだという。「日本軍が攻めてきて、まず鶏を奪って行きました。それで怖くなって湿地帯の沙州圩の中州に逃げました。ところが銃を持った日本兵が対岸でオーイオーイと呼ぶので仕方なく迎えに行きました。日本兵は中州に上がると若い女性だけを捕まえ空き家に連れ込みました。その女性は叫んでいました。日本兵が去ると女性は下半身は裸にされて泣いていました。私の家は焼かれ、ある日日本兵に捕まりましたが振りほどいて逃げました。焼け跡に住んでいた別の女性は逃げらず二人の日本兵に強姦されました¹⁸。

中華門の近く文思巷に住む楊明貞さん(1930年生れ)は当時七歳だった。その日からの出来事は彼女のトラウマとなって脳裏から一生消えることはないだろう。「南京陥落と同時に日本兵が家にやって来て、まだ幼い私を抱き上げズボンで脱がそうとした。父は私を守ろうとして、刀で首を切られ瀕死の重傷となった。次の日に

また別の二人の日本兵がやって来て、瀕死の父親の目の前で私と母を輪姦しました。母は何度も許してくださいと拝みましたが、日本兵は銃の先を母の下半身に差し込みました。」¹⁹父は傷がひどくてすぐ亡くなり、母も泣き苦しんでまもなく亡くなりました。

揚子江を隔てた対岸の浦口に住む張秀英さん(死去)は、当時の事を思い出すと眉間にしわを寄せ険しい顔つきで話し出した。「寒い冬の時、日本兵が南の方からやってきて村に火をつけ男たちを銃剣でつき刺していました。女たちを広場に集めて上半身を裸にしてぐるぐる走らせました。数日後日本兵が私を見つけ腕をつかみました。私がやられている間に家で寝かしていた乳飲み子は焼け死にました。三歳の男の子を連れて真冬の山の中を逃げ回り、山の中でも日本兵に襲われて指を切られ銃の台尻で肩を殴りつけられました。その後腕が上がりなくなりました。」²⁰

揚子江ほとりの下関にある英国人経営の食肉工場の和記洋行に避難していた陳文恵(仮名)さん(死去)は、避難していた少女たちと共に早朝に野菜つみに出かけて約十人の日本兵に襲われました。「私は妊娠していたのです。一緒に強姦された少女は下半身が血だらけでした。母はこのことは誰にも言うんじゃないよと言いました。」²¹と恐怖の体験を語る陳文恵さんは、いつも訪問する度、苦しげに話していた。

南京城内に住んでいた陶秀英さん(1928年生れ)、「12月13日、日本兵が自宅の染物工場にだれ込んで避難していた住民を虐殺するのを目の当たりにしました。その後、避難先の国際安全区内で叔母さんの子供を子守していたところを日本兵に押し倒されました。「日本兵は子どもの母親を捜しているのだと思いました。まさ

¹⁸ 『南京戦 切り裂かれた受難者の魂』、P271、鄭桂英

¹⁹ 同前、P213、楊明貞

²⁰ 同前、P54、張秀英

²¹ 同前、P84、陳文恵

か子どもの私がやられるとは思いませんでした。でも当時の事を本当は話したくない。」²²と秀英さんは語っている。

張秀紅さん(1926年生れ)は国際安全区内の空き家にお祖父さんとして、花姑娘を捜しに来た日本兵数人に犯された。「日本兵は私をベッドに押し倒し、『姑娘、サイコサイコ』といました。私は服を脱がされ・・・後は気を失いました。日本兵が立ち去った後、祖父はまだ幼い彼女の体を抱きしめ泣いていました。」²³と張秀紅さんは話している。彼女は、南京大虐殺を証言する為に日本各地で講演をした。その時にはいつも十字を切り、神に祈っていた。

当時満年齢八歳だった張俊英(仮名)さん(死去)は、中華門外の避難先で日本兵に犯された。「私が六十数年間、夫も娘にも誰にも言わずに苦しんできました。」日本で証言を終えた彼女は「自分と同じように犯した日本兵もこれまで苦しんできたのでしょね。閉じ込めていた私の苦しみを日本のあなた達が受け止めてくれました。私の心の中にあった氷のような塊が溶けてきたようです。」²⁴と言われた。彼女は何時も話し始めると、のどが苦しくなって体が小刻みに震えていた。

黄恵珍さん(死去)は、当時家族と一緒に難民区の陰陽堂(金陵大学の西側)に避難していたが、家に踏み込んできた日本兵に捕まり他の女性たちと共に強姦された。「夫は、私の被害を知っており、折に触れては、責め暴力をふる

いました。夫の母親もことあるごとに汚い女だと罵ったことがつらかった。」と黄恵珍さんは、額にある夫に殴られた傷を見せながら話していた²⁵。

先に名前を挙げた証言者のみなさんは、私たちが調査を進めていく中で出会ったり、探し出し、やっとお会いできた証言者たちだ。彼女達の多くはトラウマを抱えていて、話を聞くたびに思い出し涙が止まらない人もいる。筆者が組織する銘心会南京は2001年から来日した証言者(40余名)に「心のケア」活動を行っている。夏は日本から歴史認識の学習の旅に参加した団員と幸存者と家族達との食事交流会を開催し、お見舞金やお土産のプレゼントをしてねぎらっている。また春には、幸存者一人一人を見舞って、健康や生活の様子を伺い、お見舞金やお土産を手渡している。老境にある幸存者達が少しでも安らかになってほしいと願っている。

五、日常的に頻発した性暴力の背景

筆者は、1997年から南京攻略戦に関係した日本兵士を取材し始めた。収集した貴重な証言資料は2002年に証言集²⁶や写真パネル²⁷にしてまとめた。その後も調査を続けて、結果的には250名の元兵士を取材記録することができた。南京の街に飛び込み聞き取りをしていた被害者の証言は2003年に証言集²⁸としてまとめ、その後も取材を継続し300余名の記録を残した。更に2009年には、ドキュメンタリー映画『南京引

²² 同前、P142、陶秀英

²³ 松岡環『銘心会南京訪中報告集』、張秀紅

²⁴ 『南京戦 切り裂かれた受難者の魂』、P217、張俊英

²⁵ 松岡環『銘心会南京訪中報告集』、黄恵珍

²⁶ 松岡環『南京戦 閉ざされた記憶を訪ねて』、社会評論社、南京攻略戦に参戦した日本兵士102名を選び出して、虐殺の内容や地域を分類して証言集を編集した。

²⁷ 松岡環『写真パネルー南京閉ざされた記憶』、写真パネルA1版(90×60センチ)58枚から構成する。上海線から南京大虐殺、集団虐殺や強姦、生活の破壊、外

国人記者の報道、被害者のその後の生活、死体埋葬、東京裁判、日本で否定する者の横行、未来に向けて若い世代に訴える。(その他松岡環編集の南京大虐殺7枚のダイジェストパネルがある)

²⁸ 松岡環『南京戦 切り裂かれた受難者の魂』、社会評論社、南京大虐殺を生き延びた120人の体験者を聞き取る。虐殺の内容(集団虐殺、強姦、放火略奪に大別する)や地域を分類して証言集を編集した。

き裂かれた記憶』²⁹を製作した。

私たちが取材した多くの兵士たちは、沢山の中国人たちを虐殺した事実を話し、戦闘の合間や駐屯した時に「掃蕩や三交代の警備が終わったら、徴発に出かけたり、賭けをしたり遊んでばかりだった。」「ただだぶらぶらして居った。」「徴発にはよく行った。」と証言している。

歩兵第三十三聯隊第八中隊の居付万亀男さん(死去)は、中隊長から「南京に入ったら、殺人、放火、強盗、強姦全て許可する。」と命令の傳達があったと言う。南京城内に入っただけで、上の者から「何をぐずぐずしている。早く盗りに行かんか。」と言われている³⁰。同聯隊の第十二中隊の豊田八郎さん(死去)の日記には「一二月一六日、晴れ、木曜日 午後我々は糧秣を徴発に行く。」「一七日、晴れ、金曜日、午後七時半起床 午前中城内へ徴発 醤油等を午後休養す」「二四日、晴れ、金曜日 八時起床 九時頃より徴発 米フトン石油等を 正午帰る 南東へ」と書かれている。規則正しく行動する軍隊のはずだが、戦闘が終わると起床時刻は遅くまちまちだ。そして、南京滞在のほとんどを食料や日用品を奪いに出かけている。豊田さんの部隊は十四日の師団単位での掃蕩が済むと、数日後には南京城の南方郊外の西善橋という小さな部落での警備が任務であった。ここでは連日徴発に出かけて午後休養と気ままな暮らしをしている³¹。二四日は午後宿舎へ帰って後「南東へ」とあるが、何をしに行ったのだろう。南京城内の金陵女子大警備をした同聯隊第六中隊の亀田徳一さん(死去)は、13日の朝南京城門の一つの太平門で掃蕩し数日後は金陵女子大(1937年当時の名称は金陵女子文理学院)

で警備に着く。亀田さんの証言では、「十三日の朝に太平門から入り五百人ほどの男も女も子供も寄せ集め、地雷で爆死させ、油をかけて焼き、翌日生存者に止めを刺した。」「女子大の警備が終わると暇だから、女の子を捕まえる兵隊をたくさんいた。強姦は路上でもよく見た。警備の任務は限られているので、後は暇だから、自分の部隊では、女性を捕まえに行く兵隊が殆どだった。」と話している³²。

支那方面軍指揮官の松井石根大將陣中日記には十二月二十日には難民區に収容されている中国人は12万余にたっし、米人宣教師達や紅卍会の人達が協力して保護していると記している。そして末尾に「尚聞く所城内残留内外人は一時不少恐怖の情なかりしか 我が軍の暫時落着くと共に漸く安堵し来たり 一時我將兵により少数の掠奪行為(主として家具等なり)強姦などもありし如く 多少は已むなき実情なり」³³と松井石根は、兵士の間に日常的に多発していた強姦略奪に関して、多少は已むをえない程度の認識としか捉えられていない様だ。

日本軍が侵攻した当初は、食料品や家畜、日用品を奪われては暮らしが成り立たなくなるので人々は盗られまいとした。しかし無残に殺害されることを知り、土地を離れて逃げるか、されるがまましかなかった。大部分の貧しい人々は、逃げて金も尽きたり、暮らしが立たなくなり、家に戻るしかなかった。

日中戦争開始の頃はいったん戦闘が終わり次の作戦まで羽を伸ばすことができると多くの兵士が語る。「羽を伸ばすこと」には、物や女性を漁り奪うことが含まれていた。

南京大虐殺や性暴力を否定や矮小化する人々

²⁹ ドキュメンタリー映画『南京引き裂かれた記憶』、総監修:松岡環、2010年香港国際映画祭ドキュメンタリー部門招待作品、ニューヴァージョン『南京引き裂かれた記憶』、監督:松岡環、2011年上海国際映画祭招待作品となる。

³⁰ 『南京戦 閉ざされた記憶を訪ねて』、P 297 (仮名:

井上益男上)

³¹ 同前、P 98 (仮名:松田五郎)

³² 同前、P 128 (仮名:徳田一太郎)

³³ 財団法人偕行社『南京戦史資料集Ⅱ』、P 145、十二月二十日

は、「規律の厳しい皇軍は、自由な時間がなく、憲兵隊も取り締まる中で犯罪が起きるはずがない。やったとしても一部の不心得者で少数である。」と言い切る。しかし、日本軍将兵の日記や証言から大部分の兵士たちは南京の街中をうろつき好き放題に行動していた。(軍隊に対する) 犯罪を取り締まるはずの憲兵が1937年12月17日の段階で、わずか17名に過ぎなかった。広大な南京城内外に於いて多発する掠奪放火殺人強姦を取り締まれるはずがなかった。

上述にもある歩兵第三十三聯隊第八中隊の居付万亀男さんは「憲兵はほとんど見なかった。」「後になって中隊から出した補助憲兵の言うことは、だれも聞かなかった。」と話す。同聯隊二中隊の田中二郎日記³⁴には「一月四日、クーニャン徴発には皆元気だ。毎日の如く上司の達しは婦女子関係だ。南京に私設慰安所出来たという。桜と桃と。」「一月二十日 今日はどうとう連れ込で来た 乳児あると泣く」「一月二十三日 昨夜はクーニャンを連れ込んで やかましくて眠れない。おれは気が弱い。」と記し、田中の部隊では、「クーニャン徴発」と称する性暴力が日常的だったことが覗い知れる。

H. J. テインパリー編『戦争とは何か—中国における日本軍の暴虐』では、日本兵を取り締まらない憲兵や強姦未遂を起こした憲兵について報告(事例一七五)されている。「一月一日午後四時、三人の日本兵が漢口路一一号にある大学所属の建物の中で、一四歳の少女一人を強姦した。同じ部屋にいた一人の女性が大学の門へ走って行って憲兵を呼んだが、憲兵の行動は緩慢で、現場へ着いた時は手遅れだった。」「[ベイツ] ³⁵

以上の点から、南京大虐殺下で性暴力が大規

模に頻発した事は客観的に見ても事実と言える。その理由には以下のいくつかが考えられる。

①1937年8月15日の「暴支膺懲」声明にも見られるように、日本人は中国人を蔑視し、敵の女は戦利品的に何をしてもよいという考えが、将兵の中に色濃く存在した。

②過酷な人権軽視の軍隊内で差別の連鎖として最下層の被占領民が殺人や強姦、掠奪の被害を受けた。日頃抑圧を受けている兵隊たちは、中国人を標的にして、その不満を解消した。

③各師団の上層部間で南京一番乗りをあおり立て、物資搬送を軽視して歩兵の先行が目立った。食量は現地調達に頼ることが多く、敵地での徴発は掠奪を意味し、当然の様に女性を略奪した。

④憲兵隊の配備が少なく、勝てば官軍の無責任思考が蔓延し、将兵の不法を取り締まらなかった。

他には、軍隊内のモラルの低下などを大きな原因の様に上げる人がいるようだが、一番大きな要因は中国人蔑視をもとにして女性であることの二重三重の人権侵害が、近代史上でも稀な大規模な性暴力事件を引き起こしたと言えるだろう。

おわりに

筆者は、1997年から加害側の元日本兵士と南京大虐殺被害者をそれぞれの家に個別訪問し、動画撮影、写真、音声を記録に残してきた。現地で取材する過程で、多くの中国人研究者から学び、交流した中で、重大なことを学び取った。それは、「南京大虐殺は日本の中国侵略の象徴的な出来事である。」と言う概念である。日本軍が都市や村に侵攻する時だけでなく戦火が収

³⁴ 『南京戦 閉ざされた記憶を訪ねて』、P 78

³⁵ 洞富雄『日中戦争史資料9』、河出書房新社、P 113、第175件。国際安全区に於ける日本軍の悪質な暴行事

件170件は選び出されたものに過ぎないと編者の洞富雄氏は言われる。

まった後や残敵掃蕩を行った時にも、中国人の老若男女に関わらず殺しつくす、奪いつくす、犯しつくす行為を行った。その状況は、被害者だけでなく元兵士の証言や日記からも数多く得られたのである。

また南京以外の市町村で聞き取り調査を進めていくと、中国戦線が拡大するにつれ、南京だけでなくその他の都市でも惨案と言う残虐事件が頻発した。『侵華日軍暴行総録』（河北人民出版社）には、主に1931年の「満州事変」から日本の敗戦まで、日本軍による戦争被害が記載されている。この記録は、35年にわたる調査を経て、140万字2272件の日本軍の暴行記録が収められている。日本軍が組織的に起こした残虐事件は、中国の各省、各市町村などで档案資料として残されている。

日本兵士が当然のように中国人を殺害した状況は、第16師団歩兵第33聯隊（三重県久居市）の松村氏が、1937年10月河北での戦線の時に故郷の父親へ送った手紙にも書かれている。「米等は二日も三日も無い時がありました 而し鶏や豚や牛等何でも勝手に殺して食ふのですからそんなに心配もないです 金銭の必要は全くありません 何しろ上陸以来一銭も買ふ処も無く買ふ物も無しですから 支那軍はドンドン退却して行きます 支那人は皆何処かへ逃げています 年寄りの人とか子供等が残っています 始めの間は之等も皆銃殺しましたが 今は殆ど平和に成って殺しません」松村達日本軍は、南京へ到達する前の河北では、携帯の食料は無くなるが、農民の家畜を取って殺しそれを当然のように、何も心配ないと書く。その後に何気もなく農民の老人や子供を殺害している事を書き送っている。歩兵第33聯隊のK氏の日記には、「(1937年)十月十四日 七日目三時起床 しろこする 夕方堯山着 七時着 便衣隊捕ばくす 石材の大山あり雄大なり大城壁あり 便衣三名切る」と農民の服装をした男を捕まえて斬り殺

している。この聯隊の行程から推測すると河北の中部、おそらく石家荘あたりで日記を書いていると思われる。このように一般の下級兵士も南京へ行くまでに農民や一般の中国人を殺害している。250人の元兵士を聞き取り調査していても、日本の軍隊では敵国人と見なした人々を殺すことは当たり前だった。同16師団38聯隊(奈良県)の吉岡氏は南京陥落後、白旗を上げて和平門に投降して来た約1000人の捕虜を捕まえ武装解除した。その中から5名を城門の付近に引き出して首を斬っている。彼は筆者の何度かの聞き取りに際し「松岡さん中国人の首を斬るなんて、蚊やハエを殺すのと一緒ですよ。」と両手を頭の上でぱちんとたたたく動作をして説明した。

筆者が南京攻略戦に参戦した日本兵士と南京大虐殺下の被害者を集中的に調査し始めたのは1997年の秋からだった。その後、途切れることなく十数年間に渡り、二五〇名の元日本兵士の訪問調査と三〇〇人以上の南京大虐殺に関わる被害者たちを何度も自宅まで訪問し聞き取り、記録してきた。その中でも、上記の彼女たちは、性暴力の被害に遇いPTSDの症状に苦しみながらも自力で生き抜き、記憶にとどめ、来日して日本の市民に南京大虐殺の史実と戦後半世紀以上たった暮らしをも話して下さった。南京大虐殺という歴史的な災禍を被りながらも自分の生き様を語る老人たちに、私は記録する立場にありながら、強い感銘をうけた。

南京大虐殺下では、南京城内や南京近郊に住む計り知れない数の女性たちが陵辱され殺された。筆者は、南京やその近郊に住む被害者から証言を聞き取って記録してきたが、そのほとんどの人々は、自身の虐殺や略奪放火をされた体験を語るだけでなく、肉親や親族も受けた暴行を語っている。東京裁判では、殺害された一般人と捕虜の総数は二十万人以上とし、占領後

の一か月で性暴力の件数は、約二万件発生したと記されている³⁶。日本軍「慰安婦」問題の研究者である上海師範大学の蘇智良教授は、研究過程で南京大虐殺下での性暴力被害の数は、約七万人と言われている。

このような南京レイプの体験は、当時南京にいた多くの女性たちや身近な人々の口から伝えられ現在まで記憶が引き継がれてきた。

南京大虐殺は、その規模から被害者数は、膨大な数になり、それぞれの体験も異なる。それでも多くの被害者が、同じ時期に同じ場所で同じような状況で、日本兵から受けた様々な被害を語ってきた。それにもかかわらず、日本側研究家の多くが、中国人の「証言」は、南京大虐殺や南京性暴力の正確な事実として証拠にならないと退けてきたきらいがある。日本では、「証言は裏づけがなく時代を経て増幅されるもの」「感情がはいって客観性がない」と言う人がいる。侵略戦争を美化する勢力はもちろん、歴史研究関係の部門でも証言者の語る「証言」は、殆ど取り上げられてはこなかった。

2001年12月に南京大虐殺研究者たちの手によって発見された程瑞芳日記は、日本軍が金陵女子大学で起こしたさまざまな暴行を詳しく書き記している。南京大虐殺当時、程瑞芳は、毎日体験したことを夜間せつせと、時には深夜に及ぶまで記録として書き記していた。十二月十五日付日記には「昨晚、華小姐（ミニ・ヴォートリン）と私は、十二時になってやっと眠りに就いた。」十二月十七日付け日記には「今は十二時。寝なくて日記を書いているが、今日昼間、亡国の民を体験した。」金陵女子文理学院に避難していた多くの女性達やその近くに

いた多くの男性達、さらにそこに駐屯していた元日本兵の証言と重ねあわす時、南京国際安全区や金陵女子文理学院でおきた南京性暴力の実態が如実に浮かび上がって来る。

南京レイプの加害や被害の証言が事実であったことをよりいっそう証明することができる。

筆者が記録した250名の加害側兵士達の多くは、「大虐殺はなかった」と言いながらも、自分の見た範囲の中で、中国人の集団虐殺の目撃や実際に手を下した状況、戮り殺しや性暴力を語った。一つ一つに具体性があり事実であることが、複数の兵士の証言や被害者の証言の重なりから、事実であることが裏付けられる。しかし元兵士の中には、実名を名乗れなかったり、略奪や放火などの一部分しか話さない人もかなりいる。その理由は、日本国内では「南京大虐殺」や「慰安婦」を否定する歴史修正主義派勢力の攻撃が年々大きくなり、自分や家族に降りかかる圧力を強く感じるからである。

中国の被害者の証言や元日本兵の語る証言は歴史の重要な証拠である。生存者はどんどんすくなくなっていくが、今後は南京大虐殺下での性暴力を記述した資料や加害の側の証言を整理し検証する必要があるだろう。日本側はこれまで被害女性（男性も）の側に目を向けて南京大虐殺の歴史に取り組んでは来なかった。戦時性暴力の鎖を断ち切るために、日本軍性暴力が暴発した1937年の南京に今一度目を向け、歴史事実を明らかにして行くことが必要である。それと同時に被害者達の尊厳を取り戻す為の心のケアを国の政策としてやる必要がある。（連合国捕虜のケアと交流には国の施策として実施していると聞く。）

³⁶ 洞富雄「日中戦争資料8」、河出書房新社、P396
「南京暴虐事件」について的一部分：「後日の見積もりによれば、日本軍が占領してからの最初の6週間に、南京とその周辺で殺害された一般人と捕虜の総数は、20万人以上であったことが示されている。これらの見積もりが誇張でないことは、埋葬隊とその他の団体が

埋葬した死骸が、十五万五千に及んだ事実によって証明されている。これらの団体はまた死体の大多数がうしろ手に縛られていたことを報じている。これらの数字は、日本軍によって、死体を焼き棄てられたり、揚子江に投げこまれたり、またはその他の方法で処分された人々を計算に入れていないのである。」

靖国参拝や中国敵視に見られるように、日本は、侵略戦争を捻じ曲げて世界中のヒンシュクを買い、歴史認識の過ちを犯している。歴史の事実を認め、被害者への謝罪と補償を行うべきである。被害者は自己の尊厳を取り戻す権利を持っている。また日本は戦争責任に向かい合うことによりアジアからの人々の信頼を得て日本自体も尊厳を取り戻せるのだ。こんな簡単なことができないのは、戦争中からの大資本家やそれに結びついた政治家が戦争責任を免れ、敗戦後、アメリカの体制に組み込まれたまま年月を過ごしてきたからだ。日本は80～90年代経済的には発展した時期もあったが、日本はまだ真の意味で成熟した民主主義国家には到達していないと言えるだろう。

補足として、「南京陥落当時の南京市の人口についての考察」

「南京大虐殺がなかった。」と都市の街頭宣伝やテレビのバラエティー番組で言う人々は、必ずと言っていいほど、以下の様な事を言う。「当時南京には20万人しかいなかったのに、どうして30万人殺せるのか？幽霊でも殺したのか？それは中国の宣伝に過ぎない。」南京住民は20万人と言う数字がどこから出たのか彼らは具体的な資料を明かしたことがない。筆者が「20万人-30万人=10万の幽霊で真っ赤なウソ」を打ち砕く資料を見つけた時には、「南京大虐殺を否定する人たちは、こんな数字のマジックをやるんだ。」と感心した。

「南京特務機関 南京班の報告」1937年12月24日～3月末日（遼寧省档案館）は、撫順戦犯管理所の金源所長から友人の由木栄司さんを通して入手した資料である。「南京大虐殺にかかわった将兵は撫順戦犯管理所に収容されていなかったのでしょうか？」と筆者が来日された所長に質問したのがきっかけだった。金源所長は「太田寿男と言う元将校が揚子江の下関で安達

と言う同僚と10万人の死体処理をした筆供原文（本人自筆の自白原文）があります。との事だった。また南京大虐殺に係る特務機関の極秘資料があると言われて、筆者は、ぜひにお願いして南京関係の重要な2つの資料のコピーを入手した。『南京特務機関関係』南京班第一回報告NO2には、「南京市は…今次事変前迄ハ人口約一〇六萬ヲ擁シ國民政府ノ首都トシテ、其ノ建設ニ多大ノ苦心カ拂ハレタリ」と書く。南京市の人口は、1937年7月7日の支那事変（日中全面戦争）の前迄は人口が106万だと記述している。

同NO14二月中の報告（一）南京自治委員會ノ成立の項では、「入城當時ニ於ケル城内難民數ハ大約二十五萬ト謂ハレ國際委員會ノ設定セル所謂難民區ニ蝟集シテ宛然乞食ノ都タルノ形觀ヲ呈シ・・・」と書かれており、12月13日の日本軍の南京入城当時における城内の難民数は大体25万人と言われ、国際委員会の設定している所謂難民区（南京城内の八分の一の面積）に寄り集まっているごみごみした不潔な乞食の都の様な外観をしていると書き記している。

ではもう一冊の「南京市政概況 南京特務機関調整」（昭和十七年三月）を見てみよう。P13の五、（一）人口並二戸數の項では「民国二十六年三月末首都警察庁調査ニ依レバ男女合計一〇一九六六七名」

（二）同戸數 二〇〇八一〇戸ニシテ南京ニ於ケル人口ノ最大記録は一〇一〇八萬ト稱セラレテ居ル

（三）尚事變前後ニ於ケル南京人口ノ増減數ヲ見ルニ次ノ如クデアル。

民國二十六年三月末一〇一九六六七人

民國二十七年二月末 二〇〇〇〇人現在の第四區地區にして通稱難民區と稱シ外國權益區域を主體とする雜居地域（自治委員會及特務機関推定）

もう一冊を書き記した南京特務機関の役割は、

南京陥落直後前線部隊の直後に入り込み、国民党政府の資金や食料を押さえ、民衆を奴隷化する傀儡政権の設立工作に取り組み、敗残兵の摘出にも関わるのである。

南京特務機関が作成した『南京市政概況』では、南京陥落前は1937年三月に行われた首都警察の資料を使い、南京の人口が1,019,667名と詳しく記され100万人以上の人口を要していたと記述している。そして南京の人口の増減を記すために1938年2月末の人口は20万人と書いている、しかし、それは、南京市全体の人口ではなく、上記南京特務機関の極秘文章と同じく、狭い面積の第4区の難民区の推定人口であるとはっきり書かれている。ここでも、広大な行政区南京市の人口調査は出来ていない。

南京大虐殺を否定する人たちの「南京の人口20万人」とは、広大な郊外も含む南京市の面積に比べて何十分の一のわずかな面積の国際安全区内にいる推定人口を南京の人口とすり替えているのである。

中国の研究者は南京陥落直前の人口は、約50～60万人と言われている。陥落前、南京から流出する人の流れもあるが、日本軍に追われて城壁の中は安全だと考えて城内に流れ込んだ避難民もたくさんあったと虐殺を免れた生存者たちは証言している。また12月12日から13日には揚子江を渡ろうとした人たちが岸辺のあちこちで群がる。そこへ攻め込んだ日本兵が機関銃掃射をする。城内へ何とか逃げ帰ったと証言する人もいる。南京市民の中にも、南京防衛の中国兵がおよそ10万人いた。その数は日本軍側も中国軍側資料面で一致している。中国軍兵士は大部分が日本軍の掃蕩によって殺戮、また連行後処分されたと日本兵士の数々の証言や資料が物語っている。

南京市の行政区は、城外の東西南北の郊外、

農村部を含めて大変広大な面積を持つ。市民は南京城内のたった八分の一に当たる狭い安全区だけに避難して、そのほかの場所には誰もいなかったのか？南京大虐殺を否定する人たちは「国民党の厳しい命令により、国際安全区（難民区）にすべての南京市民は避難して、他の地域には全くいなかった」と言う。しかし、メディアが未発達な時代にこの論はあまりにも現実離れして稚拙である。筆者は南京大虐殺の被害者300人を10年以上かけて調査した。南京城内のいたるところで多くの被害者の家族は、繰り返し掃蕩で見つけられその場で殺されるか連行後殺害された。「城門の近くでキャタピラの音がして、兵隊の隊列を出迎えたらいきなり突き殺された」「南京城の街中で仕事をしていたら、もう日本兵の姿を見てあわてて逃げたら発砲された。」安全区と言われる難民区内でも殺害や連行が行われた。農村部でも徴発や掃蕩で農民が殺された。中華門の南郊外に住む農民は「いきなり日本兵に腹を銃剣で突き刺された。腹の傷を押さえて必死で逃げた。」と幸運にも生き残った男性は筆者に話してくれた。国際安全区以外の南京城内や郊外で明らかに多くの市民が隠れ暮らしていた事実があり、数多くの生き残った人々や日本兵士がその状況を証言している。

南京大虐殺を否定する人たちや論を述べる人たちは、当時の人口を「20万人しか居なかった」と根拠も挙げずに言う。南京大虐殺後、特務機関と傀儡政権の調査でわずかな面積である国際安全区のみで人口調査をした結果、そこに於ける推定人口「20万人」を恰も南京市全体の人口と置き換えることはやってはいけないすり替えである。その行いは研究とは程遠い行為であり、たとえ街頭の演説や政治家の応援演説であっても許される言動ではないと言えよう。